

クマの祈り

小川 糸 (作家)

ここは、静かで美しい森の中。クマ一家は、代々この、みんなの森に暮らしています。巣穴に暮らすのは、お母さんグマと、まだ幼い三匹の子グマたち。

その日、クマ一家は、冬籠もりの準備に追われていました。そろそろ、冬眠に入らなくてははいけません。すると、巣穴の外で、バサツと大きな音がします。母グマが見に行くと、なんと、落ち葉の上に、一匹のりっぱなシャケが横たわっているではありませんか。まるで、生きたシャケが、そのまま天から舞い降りてきたようです。

「まあ！」母グマは、驚きの声を上げました。両手でだいにシャケを抱え、巣穴の中に運びます。すぐに子グマたちが寄ってきて、興味津々にシャケを囲みました。実は、クマ一家は、まだおなかがいっぱいになっていませんでした。今年はドングリが不作だったのです。満腹じゃないと、眠ることができません。それで、母グマは少々不安でした。

この目の前のシャケを食べれば、子グマたちを満腹にすることができます。母グマは、さっそく料理にとりかかりました。

母グマは、三匹の子グマたちがそれぞれクエストした、三種の料理を作り終えると、最後まで残っていた頭と尾と骨を使い、スープを作りました。せっかく与えてもらったかけがえのない命を、残さず無駄なくいただくのが、最低限のマナーというわけです。

「ごはんですよ！」母グマが、子グマたちを呼び寄せます。大きな葉っぱのお皿には、それぞれ、クリームコロッケとシャケサンドとおにぎりがのっています。三匹は、ごちそうに目を輝かせました。自分の席に着き、丸太のテーブルを囲みます。

母グマは、厳かな声で言いました。

「シャケさん、私たちに命を恵んでくれて、本当にありがとうございます。私たちは、あなたと、あなたのご両親、そしてご先祖様の全てに心から感謝して、大切にこの命をいただきます。」

25 20 15 10 5

子グマたちも目を閉じ、胸の前で両腕をクロスさせ、心の中でいっしょにお祈りを捧げました。それから、冬眠前の最後の食事を食べ始めます。子グマたちにとっては、初めての冬眠です。

「あーあ、僕、初雪が降るの見たかったのに。残念そうにつぶやいたのは、フウ君でした。」「私、凍った湖でスケートがしたいなあ。」「私は、降ったばかりのふわふわの雪に、ハチミツをたっぷりかけて食べてみたあい。」「ヒイちゃんとミイちゃんも続きます。三匹の子グマたちは、まだ見ぬ雪を想像し、あれこれ好き勝手に妄想しました。でも、クマは冬眠しなくてはいけない生き物なのです。母グマは、クマ一家に代々伝わる大切な教えを、子グマたちに伝えます。

「いいですか、どんなことがあっても、絶対に外に出てはいけません。人里に近づいたり、ましてや人前に姿を現すなど、もつてのほかです。私たちがこのおきてをしつかりと守ることで、クマも人もお互いが平和に生きられるのです。」「

親の役割は、子どもが将来、ひとりでも生きていける力や術を身につけさせること。それは、人もクマもいっしょです。そのためには、時に厳しく、子グマたちにやっつけていいことと悪いことを教える必要があります。

見ると、どの葉っぱのお皿も空っぽです。スープの入っていた木のボウルには、小骨一本残っていません。シャケの生命が、全て、クマたちの体に引き継がれたのです。

「ごちそうさまでした!」クマ一家は、声をそろえて言いました。母グマが、三匹の子グマの口の中に、一粒ずつ、デザートのおハチミツキャンディを入れてやります。「さあ、春までぐっすり眠りますよ。春が来たらまた外に出て、お日様の光をたっぷり浴びて、みんなで思いっきり遊びましょう! それまで、楽しい夢を。」「

母グマも、葉っぱや木の枝で作った柔らかなベッドに横たわります。それから、目を閉じて、最後の祈りをささげました。

「どうか、目覚めたとき、すてきな春が訪れていますように。みんなの森が、豊かで美しいまま、これから先も、ずっとずっと続いていきますように。すべての生きとしいけるものたちが、幸せでありますように。」「

こうして、おなががいっぱいになったクマ一家は、冬の間の長い眠りに就いたのでした。

小川糸（おがわいと）

一九七三年、山形県生まれ。デビュー作『食堂かたつむり』（ポプラ社 二〇〇八年）は二〇一一年にイタリアのバンカレツラ賞、二〇一三年にフランスのウジエニー・ブラジエ小説賞を受賞。海外出版も多数。『ツバキ文具店』（幻冬舎 二〇一六年）、『キラキラ共和国』（幻冬舎 二〇一七年）、『ライオンのおやつ』（ポプラ社 二〇一九年）は、「本屋大賞」候補に選出される。